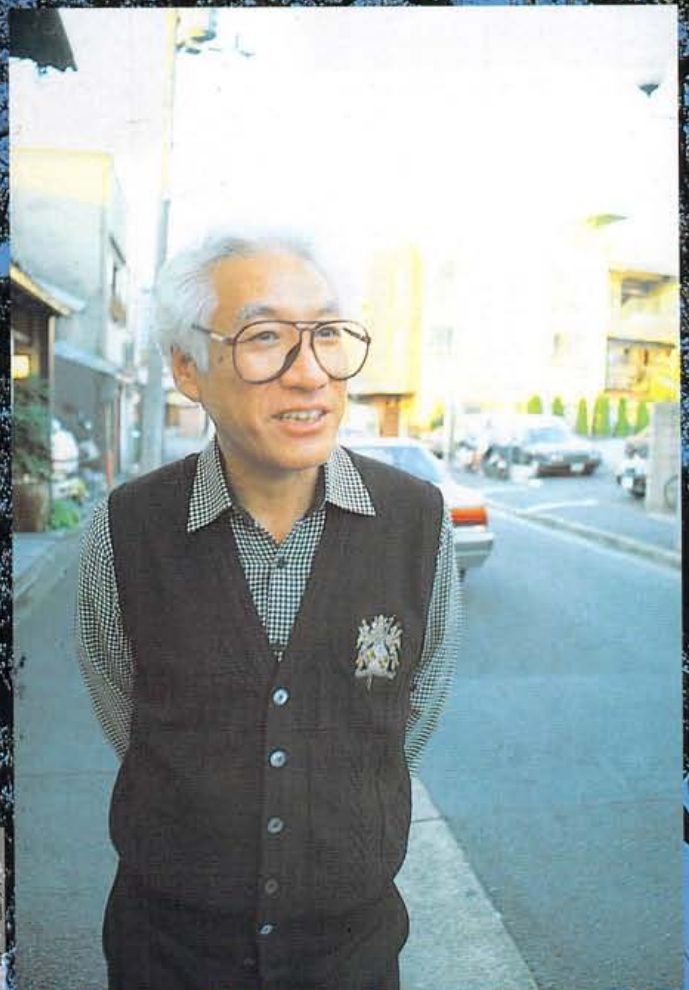


第三十二弾 張夫くんの「安吾が愛した旅館」編

寺町今出川を北へ。
閑雅な住宅地にかつて二軒の旅館があった。
その名を、清洲旅館。
昭和四十六年、閉業となるまで
そこには、
さまざまな人々が訪れていた……

赤いすし
知れぬは
標り町



磯田 張夫

すし・割烹料理店「きよす」主人。昭和四十六年まで、母が興した「清洲旅館」にも従事。現在は幅広い人脉を通して、仕事、つきあい、共に多忙な日々を送る。「人生、死ぬまで勉強です」と語る昭和十九年生まれ。



酌み交わす杯の中に

思い出の蜃気楼がちあがる。

歓喜、愛い、昂り、沈鬱、哄笑、苦笑……

若き時代の懐かしきひとときを

白玉の歯にしみ透るひと滴で、幾度も磨きながら

しばし今を忘れてゆく。



旅館に隣接するお寺。旅館の敷地も、このお寺が所有していた。

河原町今出川をすこし北へあがる。敗戦直後の昭和二〇年十二月、ひとりの女性が了徳寺より土地を借り上げ、そこに一軒の旅館を開いた。その名は、清洲旅館。

一四〇〇坪の広大な敷地。洋風・和風、それぞれにしつらえの違うふたつの館。二〇〇を超える錦鯉が、悠々と泳ぐ池。鬱蒼と繁る木々。

立派な門構えの奥に見える建物は、旅館と呼ぶより邸に近い風格をそなえていたという。ただし、いくつもの大きな部屋には調度らしい調度は何もなかった。莫、とした空間のあちらこちらには、時折、人の気配を感じるのみである。

未だ世情が安定しないその時節、なぜそんな旅館をはじめたのか。それはもう、判然としない。旅館を開業した女性には夫がいたが、彼はそれほど旅館経営に興味をもっていたわけでもなかったという。

昭和四十六年、ふたたび了徳寺へ土地が返されて以来、今日までこの旅館は閉じられたままだ。だが、そこに想いを残す文化人は大勢いる。

当時、京都大学へ入学するために、多くの受験生がここに宿泊していた。ひとつの部屋に数名が同宿し、勉学に励み、そうして入学していった。

その中には現在、京都大学の教授となり各方面で活躍する人も多い。それらの人々にとつて清洲旅館という名は、忘れられない青春時代へのパスワードともなっている。

酌み交わす杯の中に想い出の蜃気楼がちあがる頃、誰かが「きよす」と口の端にすれば、忘れていた憧憬がみるみるうちにひろがってゆく。歓喜、愛い、昂り、沈鬱、冷笑、哄笑……そうした若き時代の懐



かしきシーンを、白玉の歯にしみ透る一滴一滴で繰り返し磨きながら、京の学者さんたちは、しばし時を忘れてゆくのだ。

ところで、そんなカウンターの風景は、しばしば同所できりかえされることが多い。そして、その店の名もまた、「きよす」なのである。

すしと割烹料理のこの店はやはり寺町今出川をあがった処にある。オーナーは磯田張夫氏。実は、前述の清洲旅館は氏の母上が始められたものなのだ。

磯田氏は昭和十九年生まれ。旅館ができたのは一歳のときである。以来、二十七歳までの時期を、氏は清洲旅館とともにすごした。

「とにかく、大きな旅館でした。広い部屋がいくつもあってね。年末の大掃除の折など、よく手伝わされたものですよ。でも、廊下の雑巾がけひとつにしても、しんどいというより辛かったですね」

庭を東へゆくと、そこはもう、鴨川だった。夏、鮒やドジョウ、カマツカなどの魚を捕まえては鯉の泳ぐ池に放し、秋になるとその池で釣りをして遊んだという。

また、「庭がすいぶん広かったものですから、従業員さんや友だちとよ

京ごころ

潤いを刻むハッ橋と、
くつろぎの深さに喜びを思う。



井筒ハッ橋本舗には、たおやかな時間が流れている。貞享年間の創業以来つづく暖簾ひとつとれば、京都を代表する老舗である。しかし、オリジナル商品の「タ露」(タチ)の考案や、業界に先駆けておこなってきた機械化の導入などして目に映るかもしれない。それらはすべて、ハッ橋を販売する店という地位にとどまらない、柔軟な考え方にありたい。京にハッ橋の店は数あれど、井筒ハッ橋本舗は他店に見られないようなさまざまな魅力があることを自負する。こと紙園店ともなると格別。訪れる人びとにくつろぎの時間を供

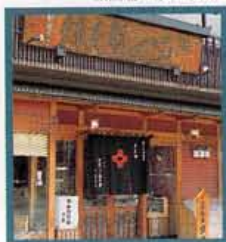
することを第一とし、お菓子とは、心をこめる器。というかたくなまでの主義を貫きつづけているのも自慢のひとつ。それはもてなしの心を前提にした店づくりや店員たちの物議のやわらかさに代表されている。まず、紙園は南座の近くに店を構えるという意義を尊び、店舗はまちの風情に馴染ませてつくられている。天井、壁などのひとつひとつに工夫が生きる。さらに「タ露」「タチ」も南座、すなわち歌舞伎を意識した資料の。店のなかに歌舞伎に関する資料や雑記類がズラリとそろえられているのもこうしたこだわりから。人びとの交流の場としての役割を果たせばという願いが込められている。

はじめて店を訪れたとき、ハッ橋とともに差し出された一杯のお茶に少しばかり戸惑いをおぼえるかもしれない。それは、店側の客人に対してのささやかなもてなし。店の装飾や商品にことさら贅をうたうのではなく、どれも気軽に立ち寄ることができる空間。さらには人による真心で対応する姿勢には今も昔も変わらない。ときに「ぜひお茶のサービスをつづけてください」といった内容の手紙が届く。それは地道な努力が報われる瞬間だ。そして、今日も井筒ハッ橋本舗は、人びとのオアシスとなる目を夢見て「くつろぎ」という名の水を湛える。

井筒ハッ橋本舗

紙園店 京都市東山区川端通四条上ル

☎(075)531-2121(代表)
営業10:00AM-10:00PM
年中無休



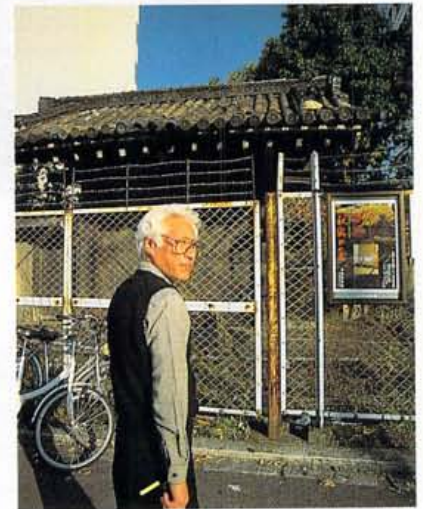
昔、ここから鯖街道がはじまった。若狭から鯖を背負い、はるばる京の町へやってきた人々がいたのである。小説にも取り上げられているが、この鯖街道には悲しい逸話もたくさんある。



昔、ここは豆腐屋さんだった。それが今では洋品店になっている。すこしづつ、町の様子がかわってきている。



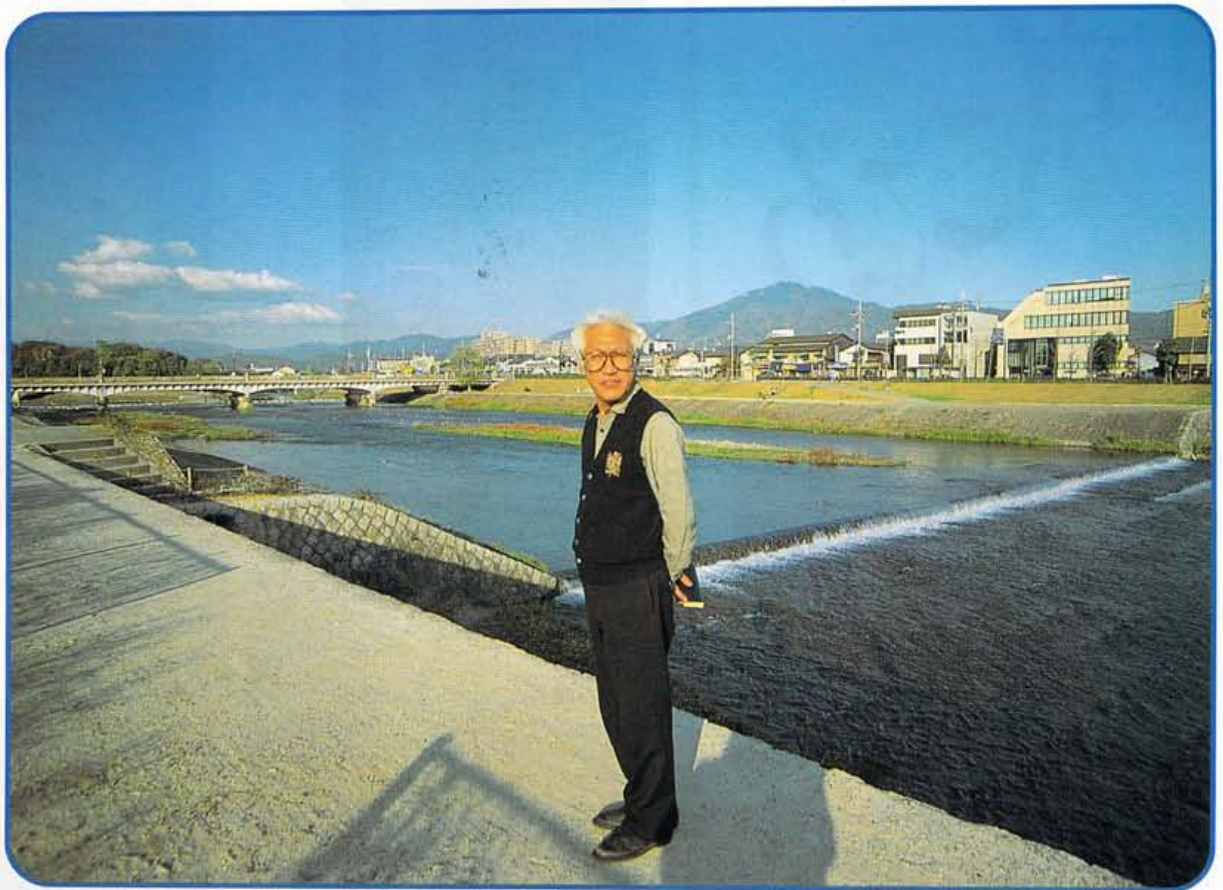
磯田氏が学校へ通う道すがらにあった卓球場。昔は、ビリヤード場だったという。外観は、三〇年前とずつと同じだ。



これが、あの清洲旅館。磯田さんはここで育った。

く野球をして遊びました。それにちよつとした雑木林もありましたから、虫採りもよくしましたね。バッタやジムシ(セミのこと)はもちろん、カブトムシも採れた。庭の中だけで、遊ぶのには不自由しなかったほどです。遠いまなざしになって当時は懐かしむ氏。中でも忘れられない光景は、かつての鴨川と、そこから眺めた大文字の送り火であるという。

今、鴨川の河川敷といえば犬の糞害があるとはいえ、コンクリートや芝生などできれいに整地されている。河川自体も改修された結果、よく云えば穏やかな、悪く云えばのっぺりとした表情で街を流れるようになってきた。しかし、当時の鴨川と云えば、川のほとりに出てゆくのがむつかしいほど、さまざまな木や草が繁茂していた。



失われゆくかつての面影。

しかし幾人かの人々の心には、
いつまでも変わらぬ姿で残りつづけるだろう。

そこでは
今日も訪れた“思い出の客人たち”を、
きっとあたたかく迎え入れているはずだ。

猛々しくひかるススキ。
風が吹くたびに、ざざ、と鳴る葎
の群。
太陽にうるむ草いきれ。

そして、小さな灌木の葉影からの
ぞく河面の表情は、今よりずつとゆ
たかだった。

深い溜りや淀み。水しぶきをあげ
ながらうねる、太く透明な流れ。後
鳥羽上皇を喚かせた往時の風情を想
像することすらできただろう。

ともあれ藍い夏の夜、シルエットと
なつて浮かぶそんな川辺の風景の向
こうに、五山の送り火があかくゆら
めくのである。

「庭の東はそのまま鴨川につながっ
ていました。そこからよく、大文字
さんをながめたもんですよ。子ども
心に、とてもきれいだなあとと思いま
した。今のように高層建築、ビルな
どはひとつもなかったですから。少
し高い所から見渡せば、ちょうどバ
ノラマのように、京の町屋を取り囲
む送り火の様子をみる事ができた
んです。

今ではもう、決して実現すること
のない景色です。この記憶は私にと
つて一生の宝物ですよ」

高校を卒業してからは、清洲旅館
に就職した。子供時代もふくめ、
訪れる人々と増った出逢いは、今も
大きな財産となっていると氏は語る。
ただそれは京の先生たちが店の常連
となっている、ということだけでは
ない。商売を通して人と人とのふれ
あいを学ぶことができた、それがい
ちばん大切なことなんですと力説す
る。

すし・割烹の店“きよす”は寺町
今出川を上がった、立本寺前町にあ
る。清洲旅館をふくめ、周囲は簡雅

な住宅地だが、すこしづつ町の様相
もかわってきている。昔の面影をそ
のままにとどめる場所は？との問い
かけに、磯田氏はしばらく首をひね
った後、梨木神社をあげた。子ども
時代、境内でよく、どんど焼き
をしたという。現在この神社の水は
よい(そしてタダで貰える)ミネラルウ
ォーターとして価値を呼んでいる。
「車が押しかけて、行列になること
もあります」

いざさか苦笑まじりに教えてくれ
た。

さて、昔語りも一段落しはじめた
頃。氏は、一片の新聞記事を取り出
した。百人一語(朝日新聞・京都市
内判)なる文章には坂口安吾が紹介
されていたが、そこに清洲旅館が登
場する。

敗戦後、特異な美的探求と文明批
評的観点で大胆直截なエッセーや小
説をつぎつぎと発表、『墮落論』な
どでも有名なこの作家は清洲旅館を
たいへん気に入っていたそうなのだ。
哲学者・梅原猛氏が著された件の原
文をすこし引用してみよう。


「その旅館を安吾は、いたく愛し、
京へ来た折には定宿にしたという。
安吾の死後、私はしばしばこの旅館
に赴いたが、そこで私は安吾のこの
話を聞いた。以後、安吾を考へる時、
私はいつも「ガランドウ」の部屋の
あるこの旅館を想起するのである。
今、この旅館も歳月の流れるままに、
朽ちてゆく一方である。鯉が泳いだ
池、子どもたちが駆けめぐった広い
庭さきも、かつての面影は徐々に失
われつつある。

しかし幾人かの人々の心には、い
つまでも変わらぬ姿の清洲旅館が残
されている。そこでは、今日も訪れ

Twinkle Snow World




楽しくて一日が短かすぎるから
もっと遊びたい人の
わがまま聞いてあげる

早起きさんに
朝4時からの


(年末・年始・土・日・祝のみ営業)

Sunrise Ski

もっと滑りたい人に
夜9時までの


(年末・年始・土のみ営業)

Twilight Ski

京都より4時間
— 鷲ヶ岳ツインゲレンデ —



昨シーズンオープンしたオーロラゲレンデがさらにダイナミックに拡がりました。標高1350mのクワッドリフトの終点からの眺望は最高。



広くてなだらかなゲレンデとスリリングな林間ゲレンデが織りなすファンタジックエリア。スノーマシンも完備してコンディションはいつも上々。

■宿泊施設

ホテル・レインボータワー
ひるがの高原ホテル本館・新館

☎ 株ひるがの大阪営業所
☎ (06)251-3189

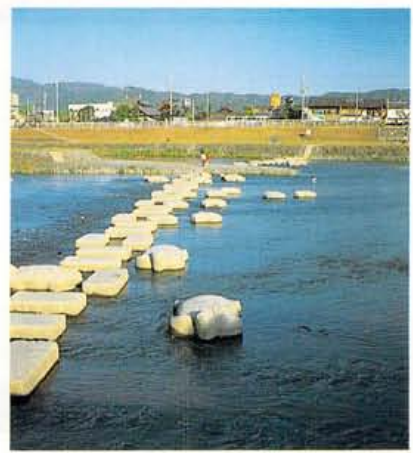
■直行バスのご案内

大阪発スリーパーカー号(毎週3往復)
月、水、金の夜発 水、金、日の夕発

京都駅八条口 21:40発
☎ ニチアトラベル・サンシャインツアー
☎ (06)344-3077

パンフレットご請求ください。

鷲ヶ岳スキー場連絡先 ☎(0575)2-5105
ホテル予約受付 ☎(0575)2-5102
岐阜県郡上郡高鷲村大鷲字平沢3262



これは、現在の鴨川。かつての面影はもはやどこにもない。この場所をみると、京都もかわったなあと感じるのだそうだ。



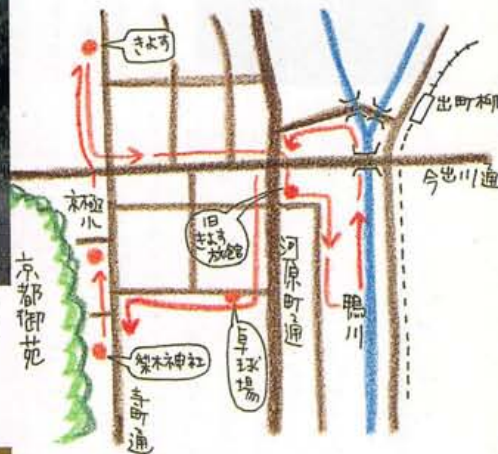
磯田氏が通った京極小学校。昔は木造校舎だった。当時から児童数は少なく、一学年に3クラス程度だったという。ちなみに湯川秀樹博士は、この小学校ご出身だそうです。



これは梨木神社の水。今、名水として注目されている。誰でも夕ダで水をもって帰れるので、時には行列ができることも。磯田氏も子どもの頃は、よくこの水を飲んだ。



梨木神社の境内。むかしから、ここで落葉などを集めて"どんど焼き"をしていた。よく、手や顔を焼いて食べたという。



カウンターに並んだ、昔の写真。かつての清洲旅館が撮影されている。磯田氏にとって、何にも替えがたい宝物のひとつだ。

文/三村 溪
写真/大田メグミ
思い出の客人たちを、その時まで、迎え入れていることだろう。